

# 第9回 京都建築賞 結果発表

京都建築賞は、京都府建築士会の創立60周年を記念して創設されました。京都の歴史的文脈を踏まえつつ創造性の高い建築作品を表彰し、その活動及び業績を広く社会に伝えることにより、京都及び建築の継承・発展に資することを目的とするものです。第4回からは、次代を担っていく建築士の支援を目的として、京都建築賞に特定のテーマを設定する新たな部門「藤井厚二賞」を創設しました。藤井厚二賞については11月号、12月号で紹介します。

主催 一般社団法人 京都府建築士会  
後援 京都府・京都市・宇治市

建築

## 最優秀賞

SOWAKA

設計者

奥谷繁礼 (奥谷繁礼建築研究所／京都工芸繊維大学)  
奥谷みわ子 (奥谷繁礼建築研究所)  
岩井浩太 (奥谷繁礼建築研究所)  
吉野真実 (元 奥谷繁礼建築研究所)  
満田衛資 (京都工芸繊維大学／満田衛資構造計画研究所)

## 優秀賞

御旅所の家

設計者

波多野崇 (A.C.E. 波多野一級建築士事務所)  
倉岡愛子 (A.C.E. 波多野一級建築士事務所)  
下山 聡 (下山建築設計室)

〔審査委員会〕

委員長 竹山 聖 (株式会社設計組織アモルフ代表取締役)  
委員 井上章一 (国際日本文化研究センター 所長)  
永山祐子 (有限会社 永山祐子建築設計)

古代象形絵文字作家 竹本大亀氏  
プロフィール

1952年、滋賀県大津市生まれ。高等学校にて芸術科目として書道を選択、ライフワークとして書アーティストへの道を歩む礎を高校生時代に築き、書一筋の人生を歩み、独自の世界を築いている。漢字のルーツが絵文字であることに注目。現代の文字は絵・絵文字が記号化・符号化いわば文字化したもの、またそれは絵が抽象化したものとも言え、現代の文字を具象化することで絵文字ならではの表情や生命感を再現し、書道界に新境地を開き独自の世界を展開している。

甲骨文字や青銅器文字を用いて、世界平和や人類の幸福を神に祈願するという揮毫活動を行っており、初回は1997年の阪神・淡路大震災後の復興を祈願して生田神社で行い、以後、青蓮院門跡・清水寺・八坂神社等で奉納祈願揮毫を行う。2012年以降は京都・松尾大社の正月行事として神に通じる古代神聖文字にて、この一年をこの文字のもと、ポジティブに歩むという1字を募集、奉納祈願揮毫を行っている。

# 2021年京都建築賞 審査総評

審査委員長 竹山 聖

昨年の講評でも触れたことだが、コロナウィルス・パンデミックは相変わらず収束の兆しを見せない。どころかさらに変異株が威力を増している。国や地域ごとにさまざまな認識や判断が交錯する、この昨年来の一連の対応やあたふたぶりは、やがて振り返った時に、適切な対応であったことも頓珍漢な対応であったことも、反省とともに整理されていくだろうが、ともあれ今は、いや、未だ、渦中にある。

しかしながら現地に行つて実物に触れ、空間を体験し、そこを使い、あるいは運営する人々に会うことによってわかることもある。例年通り、写真での一次審査を経て、現地審査に赴いた。実際に訪れた順に沿って、まずはその感想を記してみよう。

△御旅所の家△は、清々しいスケールとディテールを持つ住宅で、とりわけ周囲との関係をうまくブランニングに取り込んでいることに感心した。必要があつてのことだが、駐車場を道路に面して大きくとっているにも関わらず、低く水平に伸びる屋根をかけて、それが住宅の顔となりアプローチともなっている。しかもその向こうに垣間見える心地よいスケールの中庭と、そこに配されたさりげない植栽が、道路からの眺めを奥ゆかしく上品なものとしている。丁寧に設えられた家具や親密な寸法を持つ

天井の高さと傾斜、きめこまかな使い勝手に対する配慮など、これ見よがしの空間がないために一見地味に感じられるが、とさおりふつと抜けた視線の先やスペースの広がり心地よい驚きが演出されている。たとえば中庭の植栽を透かし青空を背景にして隣地の寺院の屋根を望む景色には、住まうことのさりげない喜びが満ちているように思つた。機能をただ羅列した間取りによるお仕着せの住宅ではとても得られない快感だ。随所に細やかな工夫を見せつつ、全体はしつかりした構成を有し、格調の高い住宅となつていことが、高く評価された。

△アマン京都△は、緑に囲まれ物理的にも心理的にも外部から隔絶された宿泊施設である。京都北西の溪谷沿いに長い年月にわたつて作り込まれた地形と景観のなかに、シンプルな架構の建築が配されて、独自の世界を作っている。建築がひとつの別世界を作る試みであるとするなら、ここには確かに世俗と離れた幽玄とも言つていい風景が出現している。ただ、地形の襞に土地の記憶を刻み込んだランドスケープが展開させる驚きの連鎖に比べて、建築のブランニングやディテールがやや画一かつ単調な感もなくはなく、欲を言うなら、さらに自在に自然と呼応する驚きの空間演出があつてもよかったと惜しまれもする。

△平松△は、京都の中心地にたつ宿泊施設である。町家のイメージを継承しながら、奥へ、そして上へと伸びる空間をうまく抑制しながら計画した建築である。奥に佇む蔵を生かし、坪庭の空間をメインの建物との間に挿入して、エレベーターホールやパブリックゾーンの視線を受け止めて、都市の余白を作っているのが効いている。ただ、街路に面した既存部分の扱いに発見的な解決が欠けているように思えた。そして空間全体のスケールに伸びやかさが足りない気もした。それも京都らしさだ、ということなら、もっと面白くその小さな空間に込められた豊かさ、を表現する手法を見せる手もあったのではないかと思えた。

△コンテナ町家△は、面白い試みではあるものの、ロージの再生のためにこのような解決法がふさわしいのかどうか、個人的にはやや疑問も感じた。長屋を構造躯体に還元して立体的な空間を生み出すのは確かに面白いと感じたが、果たしてこれが今後推奨されるべき前例となつていくのだろうか、と。しかもそれが使用者の恣意に任されて、法的なことを云々するわけではないが、安易にランダムに吹き抜け部分に増床され、やや無秩序であり快適でも美しくもない場が見えたのは、残念に思えた。

△SOWAKA△は、東山の傾斜地に立地

する宿泊施設である。既存の建築のリノベーションとしても、そしてそれに隣接して新たに作られた建築としても、迷路のような豊かさ驚きに満ちて、さらには一つとして同じ解決がない多様な空間の展開にも感銘を受けた。しかもそれらが、庭との関係や、楼閣状の既存躯体、さらにはもとは裏方の部屋であつたとも聞いた空間の閉塞を段状に降りてゆく空間構成としたり、さらに深く掘り下げた風呂を作ったり、という手法で再生しているのにも挑戦的な気概を感じた。地形を生かし、既存の建物を批評的に改築し、さらにまた別のテイストで新たな建築を付加している。意欲的な試みとして評価したい、という点において審査員の意見が一致した。オペレーションを担う人々がこの空間を愛し、生き生きと楽しげに働いている様にも共感を覚えた。

その結果、△SOWAKA△が最優秀作品に、そして△御旅所の家△が優秀作品に選ばれたこととなった。

京都建築賞も、歴史を積み重ねていく。優れた作品に出会えることは審査員としての大きな喜びである。応募された方々、ともに審査に当たった井上さん、永山さん、そして準備に関わった皆さんに心から敬意を評したい。



設計者：奥谷繁礼・奥谷みわ子・岩井浩太・吉野真実／奥谷繁礼建築研究所  
満田衛資／京都工芸繊維大学



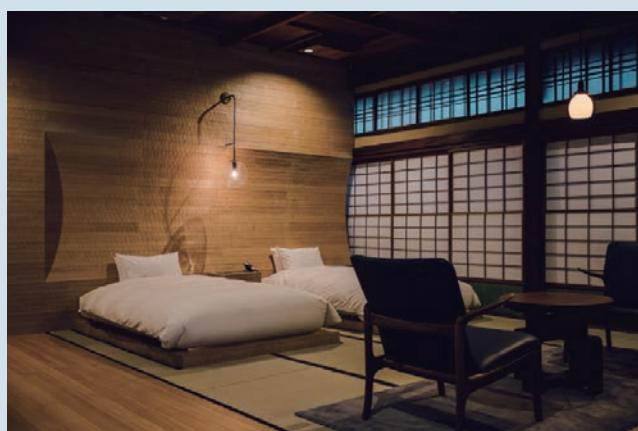
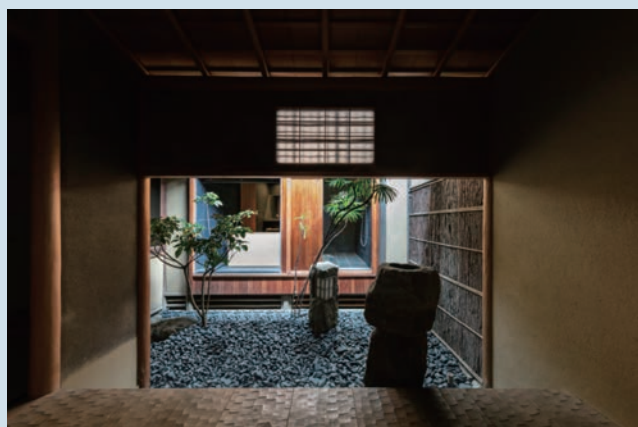
#### 【講評】

元料亭の数寄屋建築をリノベーションした本館11室、隣の新館12室の計23室からなるホテルであった。近年、古い邸宅や町家を改修したホテルがたくさん生みだされており、特に京都には既にたくさんさんの事例がある。その中でも「SOWAKA」は設計の緻密さ、空間の完成度で抜きん出ていると感じた。23室は全て違うデザインで外部空間の取り込み方、光の入れ方、仕上げの雰囲気など全てが少しずつ違った体験が生まれるようにその場のシチュエーションごとに読み解かれている。空間におけるホスピタリティとはこういうことなのかと考えさせられた。

築100年の元料亭の本館は大袈裟な手を加えずに、あるがままの状況を丁寧に宿泊の場として空間を紡ぎなおしている。元々あった日本庭園を活かし、外部空間をうまく取り入れている。庭園を独り占めするような落ち着いた部屋、高低差を活かし周囲の自然の取り入れ方が工夫された遊びのある空間。また、少し不利にも感じる景色の少ない部屋もその状況を逆手にとって暗さを活かした陰影のある空間となっている。仕上がりにも部屋ごとにこだわりがあり、様々な作家さん、職人さんとの協業が伺える。数寄屋造りの日本建築特有の細く曲がりの多い廊下から部屋に入るアプローチも通常の宿泊施設にはない体験を生み出している。陰影、外部空間との関係、アプローチ、ここでの体験が新築の新館の中でも違った形でトレースされており、本館、新館との関係が単なる増築ではない、体験の広がりを生み出している。

新館はスリット状に外部空間を差し込んだり、出窓を設けたりといった操作により、部屋ごとに外部空間とのバリエーション豊かな関係を生み出している。外部空間のスリットの幅、出窓の高さと出方など部屋それぞれに対して適切な寸法を部屋ごとに丁寧に設定していったことが伺える。せっかくなので外部空間であってもカーテンブラインドを開閉させるを得ないこともあるが、各部屋で外に開放しても決して部屋同士の見合いが生まれないようなプランの配慮も秀逸である。建築における操作は往々にして俯瞰的視点の中で行われ、その結果として内部空間が生まれることもあ





所在地／京都市東山区  
 用途／宿泊施設  
 竣工／本館：2018年9月  
           新館：2019年1月  
 敷地面積／本館： 781.69㎡  
               新館： 546.75㎡  
 建築面積／本館： 507.90㎡  
               新館： 423.65㎡  
 延床面積／本館： 850.45㎡  
               新館： 1,348.28㎡  
 構造規模／本館：木造伝統軸組み工法  
                     2階建て  
               新館：鉄筋コンクリート造  
                     地上3階地下2階

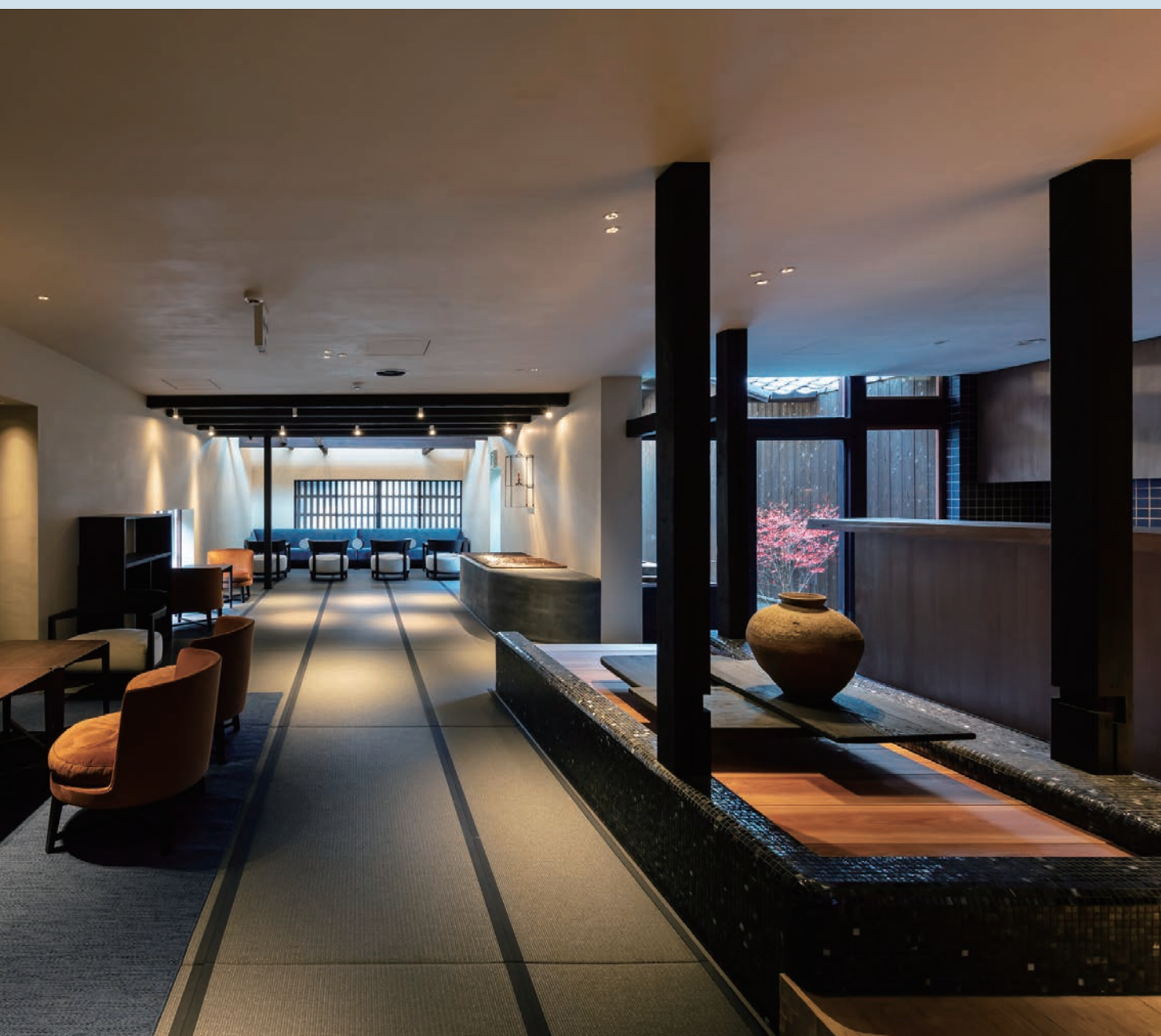
写真撮影／笹の倉舎 笹倉洋平

るが、ここでは前述のような内部からの視点で操作が調整、制御されおり、建築的な操作とそこに生まれた効果のバランスがよく、全体の構成に納得させられた。

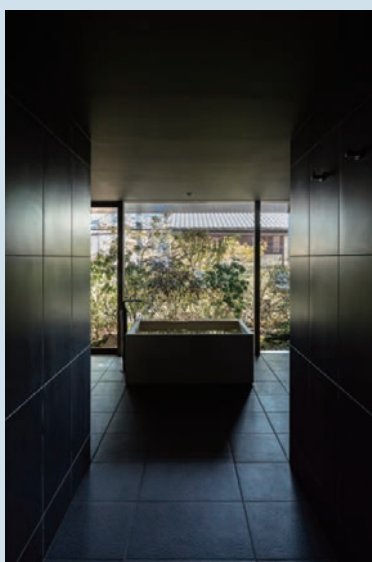
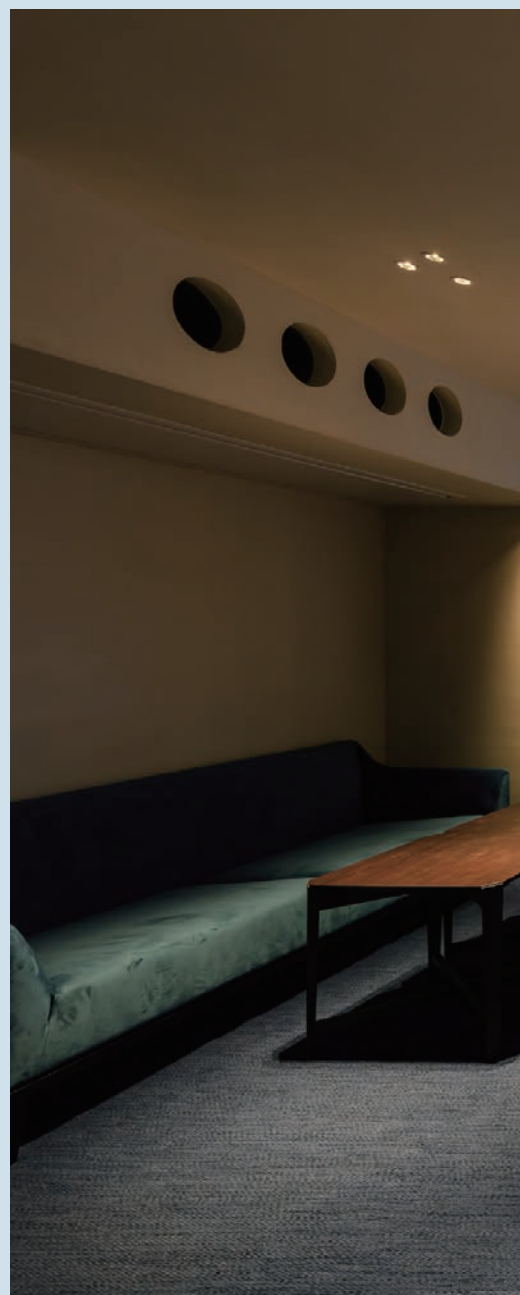
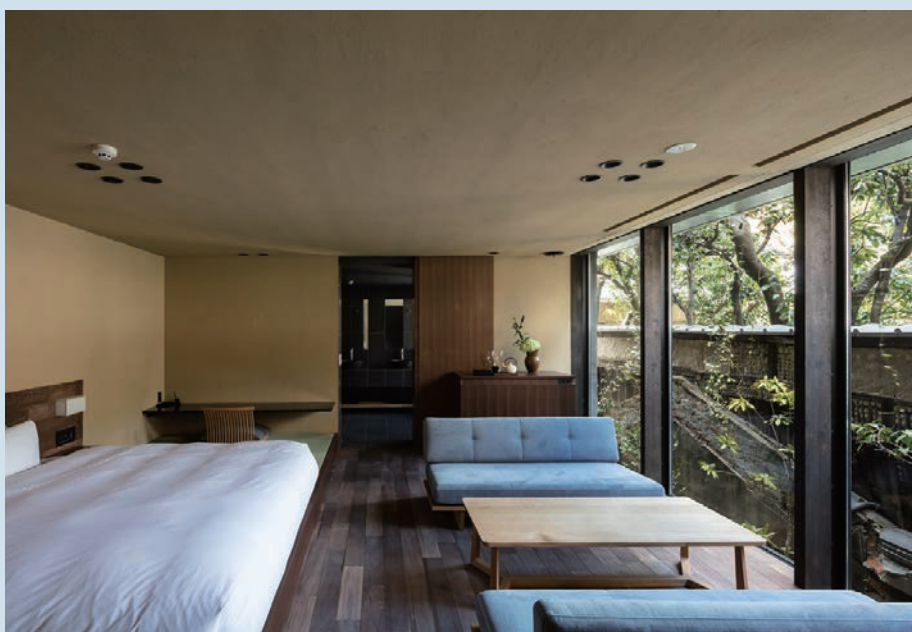
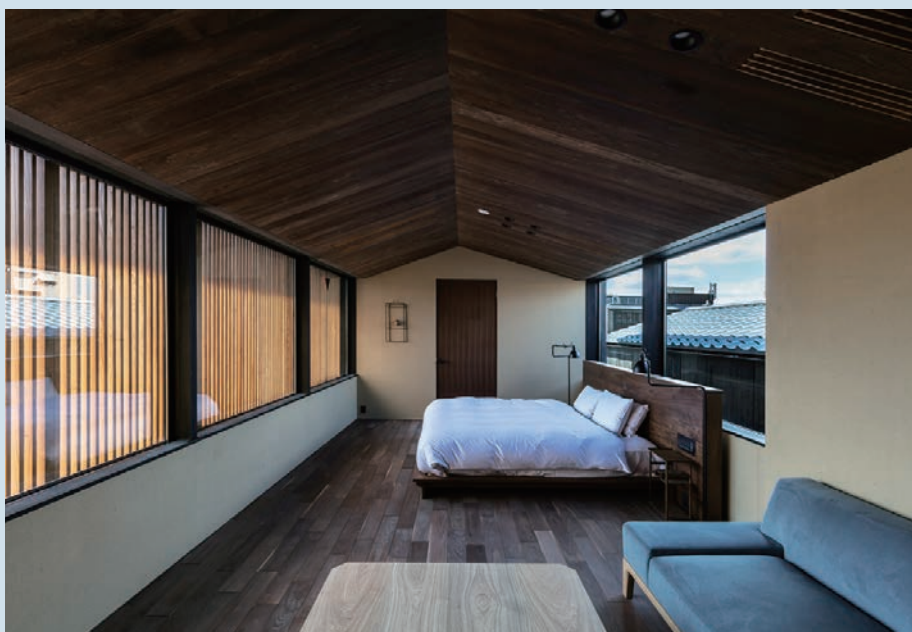
これだけの緻密さで設計をしていくのにはかなりの労力がかかったことが伝わって来て、建築家の真摯なもののづくりに強く心を動かされた。それは全ての審査員が同意見であり、堂々の最優秀賞受賞に結びついたと言える。また、ここでも一つ審査の中で出た話としては同建築家によって応募があった「コンテナ町家」であった。この作品に関しては2次審査に残り現地審査も行った。審査員の中で賛否両論分かれた。私の印象としてはまず同じ建築家によってここまでスタンスの違う作品が生まれることに単純に驚きがあった。こちらは町家路地に対してシニカルな視線を感じる。町家の路地奥は表通りの整然さとは裏腹にバラックとなっているような場所もあり、人間の生活の生々しさを感じる。この「コンテナ町家」はその生々しさがまるで立体化したようだ。実際にコンテナ上から眺めた町家の鳥瞰は心に迫るものがあった。この景色が今後どこに向かっているのかを考えさせられる。もしかするとそういう問題定義の場を作ったたかっただけではないかを感じた。「SOWAKA」とまるで「表と裏」のような関係でとても興味深い。そのような作品群が生まれるのは京都の奥深さの表れでもあるのではないかと感じ、京都の街の中で建築を作ってきた建築家ならではの視点を象徴しているようであった。今後様々な視点を持った建築が生まれてくるだろう。

(永山祐子)











設計者：波多野崇・倉岡愛子／A.C.E. 波多野一級建築士事務所  
下山 聡／下山建築設計室



### 【講評】

「御旅所の家」と、この家は題されている。御旅所は、神社の祭事で本宮から出た御輿を一時的に奉安する場所である。そして、この家はそんな御旅所の、すぐ南側にたっている。その立地をわきまえたうえで、「御旅所の家」を名のっている。

その命名は、この家に託された志を物語る。地域の祭礼からは、背をむけない。神社の祭りとともにあろうとする。そんな意欲をしめしている。

祭りのおりには、家の前をとる道に夜店がならぶらしい。提灯の飾りつけも、道を明るくしてらしたという。邸前のパーキング・エリアには、近くの住民たちもあつまってくる。そこが、地域の社交場になるのだと聞かされた。

そういえば、家のたたずまいにも、地域との連帯をしのばせるところはある。

例えば、パーキング・エリアには、一枚の低い屋根がかけられている。その水平にのびる線は、旧市街の家屋がまえる外壁の軒先線と、ひびきあう。少なくとも、つうじあうことを、どこかでねらったしつらいのだと思えてくる。

入口から中庭にむかつては、一筋の通路がとおされている。その手前側は、大きなパーキング・エリアの屋根におおわれ、やや暗い。しかし、その奥には、格子をはさみ、陽光で照らされた中庭がうかがえる。そんな明暗の対比が、旧市街で散見する路地の光景を、ほうふつとさせなくもない。

路地は、道ゆく人の想いを、しばしばその奥へさそいこむ。あそこには何があるのだろうか、いざなうことがある。それと似たような効果を、この入口と通路は果たすことができている。旧市街がかいま見せる魅力を、この家も共有しようとしているのである。

外壁の焼杉板も、伝統的な家屋群との意匠的なつながりを、めざしていただろうか。じつさい、あたりに点在する古くからの住宅は白漆喰と焼杉板の壁を表に見せている。

ただ、地域の人びとは、これを伝統にのつつた家だとみなすまい。やはり、モダンな、少しとんがった、だけどこっこいい住宅として、うけとめよう。いわゆるアーキテクトの





作品として。

例えば、北側立面の横長連続窓は、まわりからうきあがって見えると思う。あるいは、鼓の形を半分にわたったような西側の立面も。北棟と南棟のヴォリュームは、ほどよい比率で分けられている。そこに、つりあいの妙を感じる建築関係者は少なくないだろう。西側からうかがうと、ダークな南北両棟のあいだに明るい中庭が、対比的に浮上する。そこにも、計算された構成を感じ取ったりするのではない。建築の作品として。

伝統的な家屋では、屋内を外の視線からさえぎるために、よく格子をもうける。その格子を、この家は、あえて中庭とパーキング・エリアの境に設置した。視線をとざすためではなく、魅力的に外側へアピールさせるためだろう。下品な比喻でもうしわけないが、レースごしのチラ見せめいた効果を感じる。

中庭を囲む屋内が、すばらしい。パーキング・エリアの方向には、外との接点がある。しかし、この空間にたえずむ人びとは、一種の別世界を感じるような気がする。南側の部屋からは、棟できりとられた、北西にある寺の屋根がうかがえる。というか、外界のものはそれしか見てとれない。その別天地を、格子ごしに外へほめかす構えが味わい深い。

中庭へ向かって低くなる三方向の屋根は、内側から飛檐垂木状の架構でささえられる。そこに、寺の屋根と呼応する何かが、読み取れないわけではない。しかし、近隣とのつながりはそれもふくめ、みな換骨奪胎され、主知的な形で示される。京都のような街で、周囲に埋没せず、建築家の主体性をたもつひとつの回答ではあろう。その良質な成果と出会えたことがうれしい。

(井上章二)

所在地／京都府城陽市  
用途／住宅  
竣工／2019年9月  
敷地面積／272.20㎡  
建築面積／160.78㎡  
延床面積／184.40㎡  
構造規模／木造平屋建て



建

籍

## 第9回

## 京都建築賞

## 藤井厚二賞 結果発表

### 藤井厚二賞

京都リトグラフィ工房

設計者

村越 怜 (analogue)  
家入 杏

### 現地審査選出作品

3本の路地の奥のシェア住居

設計者

池井 健 (池井健建築設計事務所)  
奥谷繁礼 (奥谷繁礼建築研究所)

京都西山高校「臈館」

設計者

寺村雄機・奥村雄樹・河崎菜摘 (株式会社竹中工務店)

西橋詰町の長屋

設計者

奥谷繁礼 (奥谷繁礼建築研究所)

#### 〔審査委員〕

木村吉成 (木村松本建築設計事務所)

長坂 大 (京都工芸繊維大学 教授)

平塚 桂 (ぼむ企画編集・ライター)

#### 主催 後援

一般社団法人 京都府建築士会  
京都府・京都市・宇治市

藤井厚二賞は、幾多の実験住宅の計画を通じて卓越した洞察力、探究心、行動力をもとに新しい建築のあり方を追求した藤井厚二氏に敬意を表し、先人の叡智に学び、新たな挑戦をしている建築士の飛躍の一助となることを意図しています。

今回のテーマ「切実につくる」には、21作品の応募があり、3月9日の書類審査により現地審査対象の4作品を選出。4月2日に現地審査を行い、慎重な議論の結果、「京都リトグラフィ工房」が藤井厚二賞に選出されました。

審査講評と受賞作品について2回に分けて掲載します。



# 2021年 藤井厚二賞 講評（審査経過）

審査委員 長坂 大

昨年に続きコロナ禍での審査となった。まず書類審査と議論によって全応募作品21点から現地審査対象の4作品を選び、現地審査を終えて議論を進める段階で、候補は△京都リトグラフ工房Vと△西橋詰町の長屋Vに絞られた。個人的には異なる魅力を持つ両作品に藤井厚二賞を献上したかったが、それは主催者のメニューではなく、挙手投票と最終議論を経て前者を受賞作品に決定した。

△京都リトグラフ工房Vの魅力は、かつてのありふれた作業場が、古さを保ちつつ新しい建築に変貌し、そのことで場所のイメージを穏やかに更新していることである。

作業場の外壁の波板に塗られた緑色は、当時、外壁や塀の色としてよく見かけられた色である。今ではむしろ珍しく、ノスタルジーを喚起する「小さな歴史」要素だといえるだろう。

この建物は嵐電（京福北野線）の線路に沿って建っている。単線の線路、小さな踏み切りがもたらすスケール感、電車の走行速度や頻度が

醸し出すのどかさは、この平屋の小さな建物とほどうい関係にある。工房のパーキングスペースと作業スペースを兼ねた前庭は、塀やフェンスで仕切られることなく嵐電と連続した風景をかたちづけている。こうした連続性を「だらしなさ」と理解する人もいるが、私はむしろ都市空間の豊かさの一端だと思ふ。所有区分を徹底し、管理責任を追求しすぎると失われてしまうものがある。

この場合建築家に求められるのは、この現実を受け止め、それに対して前向きにかつ魅力的に対応する能力である。今回は対象が小さいので、繊細な神経が求められるだろう。コストは限定的であろうから、この場合の「繊細さ」にはむしろ救いであつたかもしれない。改修にあつて既存建物の外形はほとんど変化させず、明快な平面計画と各種細部によって工房機能を獲得し、新しい造形的秩序を実現している。工房各部のクライアントとの共同体制も望ましい。小さな日常を積み重ねていくことは魅力的

な社会を構築するための資本である。保存であれ更新であれ、建築家は常に過去と未来の間に立ち、クライアントと都市に向き合う姿勢が求められていると思う。

△西橋詰町の長屋Vも、過去と未来を結ぶという視点を備えた作品だが、△京都リトグラフ工房Vとは対照的な計画である。土を露出させて植栽を施された1階土間空間、2階の床を大胆に取り除いて生まれた吹抜け、屋根上の小ウッドデッキなど、既存建築、既存環境を高度に再解釈して生み出された各部は、「暗さ」や、路地奥の「眺望」が見事に実現されている。日常生活の機能性ではなく、歴史を経た伝統建築の可能性が率直に探求されている。

都市における建築の「歴史」を、ひとつひとつの個別解としていかに取り扱うかは、きわめて切実な問題であるが、そこには誰のために行うのかという問いが常に存在する。今回のコンクールを争う上でこの作品がわずかに敗れた理由をあえて探すなら、この作品が理念的には

現地見学できた4つの建物はいずれも、何って前向きな発見のある場所だった。

△3本の路地の奥のシェア住居Vは女性専用のシェアハウスという、ゲーテッドな環境が望まれるタイプの施設だ。設計者は極度に大きな容積の共用部を設けることで、閉鎖環境を保ちながらも閉塞感をやわらげており、発明的だと感じた。銭湯を思わせる大空間で（実際にバスタブもある）交流の場がハレとケでいえばケの空間というのも、女性しかない環境でのくつろぎのあり方にはあつていそうだ。入居率も高いとのこと、不動産的な価値と建築の提案を結びつけている点も見事だ。

△京都西山高校「皐館」Vは校舎、体育館など既存の3つ建物を1つに集約した建て替えだ。裏手の敷地を活用し、既存校舎のタイル貼りの壁を内部化して象徴的に扱うことで、使い手が気づいていなかった魅力を引き出していった。また実際に何うと複合的な機能が限られた面積で無理なくまとめられていることや、建て替えにより生徒同士あるいは先生と生徒との自然な交流が生まれていることが伝わってきた。

これら2作品にはしかし、もったいない部分もある。△3本の路地の奥のシェア住居Vは虚構的で、住人の営みが蓄積されにくい。シェアハウスなので問題ないのかもしれないが、長く住むには向いてなさそうだ。△京都西山高校「皐館」Vは、長坂先生が指摘されていた「動線を校庭に開くことで見せ場にできるはずなのに、閉ざしてしまいう可能性を捨てている」という部分がかなり惜しい。

つげがましくもない適度な広がりを与えている。内部には棚が新設され、多様な道具が並んでいるのだが、あたかも10年前からこうだったのではないかと思わされるほど、その様子に無理がない。まわりの環境と、すでに使い込まれた建築を、繊細に調停しながら更新している。

△西橋詰町の長屋Vは設計者が運営するゲストハウスだ。京都市中心部の高瀬川へと抜ける美しい路地の一角という、希少性の高い環境に位置する。ここは賃貸物件にも関わらず、設計者が改修費を投資している。しかも建物の継続的な価値を高めるために、主な予算は仕上げなど表層ではなく構造の補修に費やしたという。

内部の床は極端に少なく、居住可能な面積がなぜか改修で削られている。特に1階の大部分は床が張られずに地面がむき出しなので、冬はかなり寒いという。快適性や収益性を度外視した、謎めいた空間がなぜ生まれたのか。議論をしていく中で、この作品は現代でも成立するラグジュアリーを提案しているのではないかという話になった。情報化が進み、過度な利便性を追求する社会においては、高級さや便利さがラゲジ

「ある種の贅沢」に踏み込んでいながら、コスト面では厳しい現実があり、その間でやや宙吊りになっているように見えたことかもしれない。

△3本の路地の奥のシェア住居Vは、不動産的視点を含む新しい建築モデルを提案している点において高く評価したい作品である。その一方で、共有空間の世界観とそれを構成する各部分について共感しにくい点が多かったことが正直な感想である。

△京都西山高校「皐館」Vは、狭い敷地に新しい校舎を何とか挿入して、2つの既存校舎をつなげることに成功していることが素晴らしい。南側既存校舎（梶館）の特徴的外壁面を吹抜けた室内壁面としてうまく活用していることも評価できる。惜しまれるのは、L字型のもう片方の校舎（葵館）そして解体によって誕生した運動場との連続性である。これらとの「接続」がもう少し実現されていれば、より高いキャンパス計画となつただろう。

審査委員 平塚 桂

ユアリーを表現するのは難しい。むしろ希少性、アプローチのしにくさ、予測不可能さなどに積極的な価値が見出される。このような価値基準の移ろいを踏まえて極端な改修を選択したのだとしたら、京町家のリノベーションという一見ありふれた枠組みにひそめられた案の奥行きに驚かされる。

△京都リトグラフ工房Vは既存の価値基準を覆す実験性がそこまで感じられない点が気になる。必須条件ではないが、藤井厚二賞であるからにはあつてほしい視点だ。一方で△西橋詰町の長屋Vは既存の価値観をゆさぶる骨太な作品だが、荒々しくや非日常的で、藤井の生活感覚と地続きの課題解決や空間表現のあり方からは距離がある。悩んだ末、最終的に△京都リトグラフ工房Vに票を投じた。細やかな目利きの蓄積で調停された場には、一点突破で本質を突くような鋭利な革命性はないものの、生活の延長上でゆつくりとさり気なく人々の視野を広げるような、和やかな革命性があると感じたからだ。

（木村吉成委員の講評につきましては、紙面の都合上12月号に掲載させていただきます。）









所在地／京都市北区  
 用途／工房  
 竣工／2020年3月  
 敷地面積／188.68㎡  
 建築面積／115.67㎡  
 延床面積／109.77㎡  
 構造規模／鉄骨造（リップ溝形鋼）平屋建て



# 2021年 藤井厚二賞 講評（審査経過）

審査委員 木村吉成

2020年にコロナ禍に直面し、今もその最中を生きる私たちにとって人と人／モノ／産業／地域の連関を担う地点としての建物の役割を、その規模や用途に関わらず無自覚ではいられなくなった。しかし建物をつくるのには時間がかかる。社会の変化に対して、建築の持つスピード感はややゆっくりにあつた。故にコロナ禍以前に設計された建物がそのことを意識できているということは原理的に不可能だ。しかしひとつの建物は3回設計できる（と思っている）。「設計中」「建設中」「竣工後」である。特に竣工後は、ある場所に具体的な質量と質感、空間の拡がりを携えて現れる実体が自分たちの意図を越えてどこに向かってゆくのか、届くのかを客観的な当事者として批評でき、言語化される。本年度の藤井厚二賞のテーマに定めた「切実につくる」にはさまざまな意味合いを込めていたが、右に記したようなことを、それは極めて個人的な関心なのかかもしれないけど意識しながら応募作品のすべてを見た。最終選考に残った4つの作品は、どれもそれぞれの主題や問題意識を持っていた。実際に現地に訪れ体験することはもちろんだがそれぞれの設計者に今、何を考えているのか？を聞いてみたかった。

立っている。二階の床はほぼ取り去られているため、見た目の小ささとは裏腹に大きな気積を孕んでいる。奥は畳敷きの小上がりで、その奥は隣地建物との狭間に横一列の庭が見える。率直に、このような構成のリノベーションはこれまで見たことがなく驚いた。数多くの町家改修を手掛けてきた手練の設計者ならではの判断だと感じた。設計者は「町家改修の可能性のひとつを提示している」と述べていたが、町家に近世的な民家の空間性を宿したような改修手法は、このビルディングタイプの可能性を拡張しているように思えた。

△西橋詰町の長屋▽鴨川の西側沿い、河原町通りから東に少し入ったところにそれはあった。大きな建物が建ち並ぶ通りからは想像できない連棟町家の一角であり、面した石畳敷の路地に足を踏み入れた途端、都市のエアポケットに潜むような住まいを想像した。玄関入ってまず体感したのは「匂い」である。その正体は一階のほぼ大半を占める「土間」だった。それはいわゆる締め固めてつくられた土間ではない。「土そのもの」といってもよいような粗さである。土の上に東石があり、その上に古びた柱が

△3本の路地の奥のシェア住居▽京都の中心地からやや西の方角に位置する、住宅が密集したエリアに建っている。まず驚いたのはそのアプローチで、道路に面したお寺の横を通り抜け建物にたどり着く（建物裏手の小道からもアクセス可能である）。南北にやや長方形の二階建て建物を三分割し、北・南を個室や水回り、テラス等の機能を配している。真ん中は締め固められた土間であり、天窓からの自然光に溢れた二層吹抜けの大きな気積を有した共用空間だ。その一角に置かれた、むき出しのバスタブがとてもユーモラスである。各室へはここから、外部からもアクセスができるというシンプルかつ明快な平面・断面構成である。設計者が言葉にしていた「大きな気積は正義である」というテーマに全面的に賛同しつつも、その気積が持つ閉鎖性に戸惑った。正確には外部に面した開口部が無い、ということではなくそこで静止している「空気」に戸惑ったのだ。そのことを現地で指摘し、考えを聞いたのが明確な答えはなかったように思う。諸室の奥に位置することであたかも世界から切り離されたような、光に満ちた多幸感すらある共用空間。その現代的な価値・意味をばく自身見いだせなかつ

た。

△京都西山高校「皐館」▽京都西山高等学校は1927年に設立された女子校である。そのキャンパスはその時の必要性に従い、いくつもの年代にわかれて新築・増築・解体を繰り返してきたように見受けられた。「皐館」はキャンパスの北東角にかつてあった体育館を解体し生まれたスペースに計画されている。設計者の問題意識として、先に述べたような分散状態を解消することがあり、それは「学校の新たな中心をつくる」というテーマに変換され設計が行われていた。その思考は隣接する既存校舎との接続部によく表れている。ただ繋ぐだけではなく、そこで必要とされた廊下やホールを学生や教師、また卒業後に訪れた元生徒たちにとつての居心地のよいコモンとして設けている。またこれまで体育館の陰に隠れていた「桧館」の外壁を吹抜け部のインテリアに取込むなど、ダイナミックな構成もちいさな居場所の設計も共存する、大胆で丁寧な秀作であった。ただ、学校が辿ったこれまでの経緯をオーガナイズすることと、まだ見ぬ未来へのビジョンを提示することは両立できるはずである。そこへのアイデアを設計者に問うたのだが聞くことができなかった。その場の思いつきでもいい、設計者の不敵な言葉をばくは聞き取ったのだ。

△京都リトグラフ工房▽北野白梅町から嵐山へと向かう嵐電の線路脇に建つ版画家のための工房である。クライアントはこれまで私的なアトリエとしてそこを利用していったそうだが、教室や講座を開くために設計者へ改修を依頼した。建物の間口は6.5m、奥行は線路に並行した25mという平面形状である。まず最初に目に入る建物前の庭が独特である。砂利敷の地面のところどころから土がむき出しになつていて、植えられた植物と勝手に生えた雑草が混在している。その雑草は線路脇の空地に生えているものと同じであるため私有地にまず見えない。さらにリトグラフの機材や洗濯機、コンポストまでが無造作（実はそれもしつかり配置検討されていたが）に置かれているため、かなりアナキーな状態である。内部は長手に領域を二分しており、狭い方は通路と画材や本の置き場、広い方は制作スペースに充てられている。制作スペースは手前から3つの作業場に分節されており、各領域での作業特性や関連が熟考されている。見るからにローコスト物件であり、設計者は設計だけでなく（施主）施工にも大きく関わっていたようだ。こういったケースは昨今多く見られるが、この建物では設計者の「態度」が明確であった。施主の問題（建てる動機や予算など）に深く関与しながらも、片廊下形式を徹底した構成や、一番奥に設けられた自然光がふんだんに入る作業場兼ギャラリーの配置計画などからも、しつかり練られた揺るぎのないプランであることがうかがえた。

「切実につくる」というテーマの核心は、「誰」が切実なのかを見つめることにあったと考えていた。クライアントなのか設計者なのかということだけでなく、予算、敷地、環境、家族、コミュニティ、人間の生き方や価値観、そしてその尊厳。様々な事象が複雑に絡まり合う現代において、ある時は当事者となり、またある時は客観的な他者として振る舞うタフさと朝やかさが設計者にも求められている。藤井厚二賞に選んだ△京都リトグラフ工房▽にはそれがあるように思った。設計者はまだ若く作品も荒削りだが、これから先どこまで「切実につくる」設計者であり続けられるか、今後も見続けてゆきたいと思う。



## 3本の路地の奥のシェア住居

設計者：池井 健／池井健建築設計事務所・奥谷繁礼／奥谷繁礼建築研究所



所在地／京都市右京区  
用途／寄宿舍  
竣工／2019年4月  
敷地面積／307.77㎡  
建築面積／174.49㎡  
延床面積／215.49㎡  
構造規模／木造2階建て

## 西橋詰町の長屋

設計者：奥谷繁礼／奥谷繁礼建築研究所



所在地／京都市下京区  
用途／住宅  
竣工／2020年8月  
敷地面積／53.51㎡  
建築面積／44.01㎡  
延床面積／53.45㎡  
構造規模／木造伝統軸組構法  
2階建て



## 京都西山高校「皐館」

設計者：寺村雄機・奥村雄樹・河崎菜摘／株式会社 竹中工務店

所在地／向日市  
用途／高等学校  
竣工／2020年6月  
敷地面積／11,748.25㎡  
建築面積／1,103.53㎡  
延床面積／3,239.53㎡  
構造規模／RC造  
一部 S造、SRC造  
4階建て

※建築面積、延床面積は  
増築部のみ



## 表彰式



[優秀賞] 下山 聡 氏      [優秀賞] 倉岡愛子 氏      [優秀賞] 波多野 崇 氏      長坂 大 審査委員      [最優秀賞] 岩井浩太 氏      高田光雄 会長  
 [藤井厚二賞] 家入 杏 氏      [藤井厚二賞] 村越 怜 氏      [最優秀賞] 奥谷繁礼 氏      [最優秀賞] 奥谷みわ子 氏      [最優秀賞] 満田衛資 氏

第9回京都建築賞の表彰式を、新型コロナウイルスの感染が下火になってきた10月7日、本会会議室にて執り行いました。表彰状並びに賞牌の授与の後、竹山聖審査委員長（リモート）から京都建築賞部門の、長坂大委員からは藤井厚二賞部門の講評をいただきました。なお、受賞作品のプレゼンテーションは、来春オンラインにて実施する予定です。詳しくは本会ホームページの京都建築賞特別サイトにてお知らせします。